

メキシコ・チワワ鉄道に乗って

経営学部
丸谷雄一郎

私はメキシコシティで生まれ、研究対象にしているのでメキシコへは毎年のように訪れている。しかし、北部を本格的に回ったのは初めてだった。メキシコの国土は日本同様縦長である。メキシコシティ以南がアステカ、マヤといった文明が残した遺跡の宝庫であるのに対して、北部は国境沿いの大都市を除いては目立った見所は少なく、最近発展したハリウッド御用達のロスカボスや太平洋岸のリゾートとグアナファトなどの高原都市という例外はあるものの、訪れる人は少ない。今回のメキシコ視察はメキシコをより深く理解することを目的に敢えて日本人があまり訪れない北部地域を対象とした。

北部を理解するのに欠かせないのがチワワ鉄道である。チワワ鉄道はメキシコに唯一残る長距離旅客鉄道であり、内陸のチワワ州の都市チワワと太平洋岸の港町ロスチモス間の653キロを結んでいる。その行程は急行で13時間50分、普通で15時間25分ということになっている。

今回私は内陸のチワワから乗車し、途中クリールで一泊して、ロスチモスへ向かった。チワワ鉄道は一日に急行・普通とも上下1便のみであり、私が乗ることにした急行の出発時刻は早朝6時であるため、前日夕方に空路でチワワに入った。チワワはチワワ犬の由来となっていることで有名であるが、そのイメージとは対照的に、メキシコ革命の発火点となった男っぽい都市である。メキシコ革命の際、パンチョ・ビジャ率いる北部旅団は

現在の鉄道の前進であるオリエント鉄道の機関車を接収し、それで馬ごと移動し、ゲリラ戦を行い、革命軍の勝利に貢献した。その名残は街のいたるところにみられ、ブーツや馬具といった革製品の店が立ち並んでいた。

乗車当日は5時半にホテルから街はずれの駅までタクシーで向かい、列車はほぼ定刻通りにゆっくりと出発した。車内は日本の新幹線ほどではないが、特急電車並みに快適であり、クッションもしっかりしていた。20分程で車窓は田舎に一変し、放牧地やブドウ畑が続いた。今回のチケットは朝食つきだったので、8時頃食堂車で中にかつおぶしのようなものが入った不思議な味のチワワ風オムレツとトーストの朝食を食べた。いくつかの小さな町に停車しながら、列車は山岳地帯に突入した。車窓には林ととうもろこし畑が延々と続き、定刻通りの11時半に宿泊予定のクリールに到着した。

クリールは駅を中心に一本道があるだけの小さな町であるが、先住民タラウマラ族の居住地域が近く、山岳観光の拠点となっている。ぼろぼろのバスに3分ほど乗りホテルに到着した。宿は米国資本のベストウエスタンで、各部屋がロッジとなっていた。街の散策には30分もかからないので、半日コースの観光に出かけた。4WDで10分ほど行くとゲートがあり、そこからはでこぼこ道が続く。しばらく行くと視界が開け、とうもろこし畑と先住民タラウマラ族の住む洞窟が現れた。そこを見学した後、「マッシュルームバレー」と呼ばれるきのこの形の奇岩の密集地帯を散策し、この地域最初の伝道所を見学した。伝道所は非常に素朴な建物であり、メキシコ各地にある荘厳な教会とは対照をなしていた。そのうち、北海道の湖に似ているアラレコ湖を通過して夕方ホテルに戻った。

翌日は11時半に昨日降りた列車に乗車した。列車はさらに登り、13時15分海拔2250メートルのディビサデロ駅に到着し約15分間停車した。この駅にはこの列車の主要な見所である銅溪谷の展望台が設置されており、一時下車することができる。溪谷はグランドキャニオンの4倍の規模というだけ

あり、眺望はすさまじく、壮大としかいいようがない(この眺望に関しては『エスクエア日本版』97年7月号を参照、すばらしい写真が掲載されている)。列車はその後さらに数箇所の駅に停車しながら急降下していく。車窓は前半とは変わって湿原地帯となり、「ロード・オブ・ザ・リング」を思い起こさせる雄大なものであった。銅溪谷の眺望は確かにすばらしかった。私が最も感動したのは湿原地帯の風景であった。その豊かさはメキシコ南部のマヤ遺跡チチェンイツァのピラミッドの上からの光景と並ぶほどで、見ていて自然に涙が出た。私はここを見ただけでもこの鉄道の旅の価値があったと思った。

しかし、その感動の後は大変だった。列車は貨物列車とのすれ違いの都合で大幅に遅れ、19時50分予定が23時にロスチモスに到着した。ホテルでシャワーを浴び、ベットに入った後もずっと体が揺れている感じだった。

チワワ鉄道の1泊2日は大変な行程であったが、天候に恵まれたこともあり自然に圧倒されっぱなしであった。メキシコの空はどこまでも青く、その車窓はありえない光景の連続であった。今回は日程の都合上1泊2日の強行軍であったが、次回はまだ2日ぐらいかけてゆっくりと沿線を訪ねてみたいものである。



チワワ鉄道からみえる雄大な風景

スプナーとスプナーリズム

経営学部

安藤 聡

スプナーリズムとは「語頭音位転換」である。例えば 'car park' と言おうとして 'par cark' と言ってしまったり、'King Richard' を 'Ring Kichard' と言い違えるようなものだ。スプナーリズムという名称はオクスフォード大学ニュー・コレッジの学寮長を勤めた神学者ウィリアム・アーチボルド・スプナー (1844~1930) に由来する。ロンドンに生まれたスプナーはオクスフォードで古代史、アリストテレス哲学、神学を学び、生涯の大半をニュー・コレッジの研究員兼牧師として過ごした。彼はこの種の言い間違いを頻繁に繰り返していたので、それが有名になり話が脚色されていくつもの伝説になっているのである。実際に 'spoonerism' という言葉はオクスフォードでは口語として1885年頃から使われていたという。

スプナーリズムの面白さは、語頭の子音や音節が入れ替わることによって、偶然別な意味になってしまうことがあるという点にある。今日まで語り継がれているスプナーの失言に関する伝説の大半はオクスフォードの学生たちが創作したものとされているが、それらは例えば彼が「我らが親愛なる女王」(our dear queen) と言おうとして「我らが奇人なる学寮長」(our queer dean) と言い違えたとか、「半ば形になった望み」(half-formed wish) を「半ば温められた魚」(half-warmed fish) と、あるいは「よく油を差した自転車」(well-oiled bicycle) を「よく煮込んだ氷柱」(well-boiled icicle) と言い違えた、など